

氏 名	伊 藤 忠 雄 い とう ただ お
学位の種類	農 学 博 士
学位記番号	論 農 博 第 909 号
学位授与の日付	昭 和 56 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	農業生産組織の展開に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 上 村 恵 一 教 授 坂 本 慶 一 教 授 頼 平

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、大規模稲作地帯である新潟県蒲原平野に発生し、展開している農業生産組織を研究対象とした上で、今日各地に広汎かつ多様な形で形成されている生産組織について、展開のメカニズムとその理論の解明を目指したものである。

第1に、展開の論理的解明のために主体、客体および組織体という枠組みを設定して、農家と環境条件、農業生産力段階および社会・経済的諸制度などとの相互規定によって組織体は生成・発展するが、その組織体の展開がまた主体・客体を規定しつつ全体として変動するメカニズムを明らかにしている。

第2に、組織展開の多様性を類型論的に整理している。すなわち、従来の生産組織論を詳細に検討し、類別した上で、組織体は、稲作生産力および地域産業構造の差異から、後進地域では内部効果追求型と外部効果追求型として、先進地域では折衷効果追求型として生成・展開することを明らかにしている。

第3に、組織展開の過程を歴史的に把握して、制度的要因、生産力構造に規定される組織体の発展段階を区分し、1950年代の「機械化対応段階」、1960年代の「生産力対応段階」および1970年代の「経営自立段階」（機能型組織）の三段階としている。その解明の中で、農業生産組織の現段階的性格を明らかにしている。

第4に、農業生産組織にとって、客体的条件である地域経済の発展段階と稲作生産力水準、および主体的条件である農家の経営構造と経営意識を実証的に考察し、典型的な発展の形態と発展段階を析出している。その際中蒲原・西蒲原型と北蒲原・南蒲原型という対照的な地域形態を確定し、西蒲原は飛躍的、中蒲原は段階的に組織化が進んでいるが、北蒲原は中進的、南蒲原は停滞的であり、南蒲原の場合は個別農業経営の規模拡大が進んでいることを明らかにしている。

第5に、組織展開のメカニズムを稲作生産力水準の高位性と低位性を指標にして実証的に解明している。低位生産力地帯では、上層農が組織運営の中核をなすが、高位生産力地帯では、農民層分解基軸前後の2ha経営という中間層的農家によって組織化が行われ経営自立化のための補助的機能を果している。

また、高位生産力地帯では、個別上層農と生産組織との間に生起する受託競争の構造を解明して、価格

競争と非價格的技術的信賴關係との相乗作用によって組織が展開すること、および複合型生産組織の発生と展開についてもそのメカニズムを明らかにしている。さらに、低位生産力地帯では、農業協同組合等の地域主体が組織化に貢献している実態を解明している。

論文審査の結果の要旨

今日、広汎かつ多様な展開をみせている農業生産組織については、その理論的・実証的研究もまた各論各様である。けれども、それを体系的に、歴史的、地域的な視点よりまとめ、その展開のメカニズムを動態的に深く考究し、解明したものは未だ多くを出でないのである。

著者は、新潟県蒲原平野という大規模稲作経営地帯を考察の対象として、いわゆる「蒲原型」機械化体系の中から新たに農業生産組織が発生し展開してきた論理を明らかにしている。その評価しうる主なる点は次のようである。

第1に、展開のメカニズムを主体、客体および組織体という三者の対立構造でもって解明し、それらの相互規定によって展開する組織体の運動論理を構築している。

第2に、農業生産組織論を新しい視点から再構築して、地域的に三類型に分類し、先進地域には折衷効果追求型、後進地域には内部効果追求型と外部効果追求型の組織が展開することを論証し、その類型化指標とした構成員の組織参加目的、経営要素の結合の程度、および管理機能の意義を明らかにしている。

第3に、農業生産組織を発展段階的に解明して、その現段階的性格を確定している。すなわち、農業生産組織の展開は、個別農業経営の内部的条件の変化とそれを取りまく外部的な経済的・社会的諸条件や制度的条件の変動によるものであって、その視点から、1950年代の機械化対応段階、1960年代の生産力対応段階、1970年代の経営自立対応段階という段階区分に応じて展開過程を明確に論証している。

第4に、稲作生産力の高位地帯と低位地帯とに分けて、農業生産組織と個別農業経営との相互規定関係を明らかにするとともに、その競争構造および補完関係を解明し、さらに進んで、農業協同組合と組織体との関係も解明している。

以上のように、本論文はわが国の農業生産組織の展開構造を解明し、新しい視点からの体系化を理論的・実証的に行ったもので、農業経済学、農業経営学の研究に寄与するところが大きいだけでなく、広く地域農業発展の実際面にも貢献するところが大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。